

九州大学 大学史料室ニュース

第19号

2002. 3. 31.

目 次

大学アーカイブス（文書館）私見……………	2
低年次教育における大学史・大学論の意義と大学 アーカイブ — 第1回総長賞を受賞して — ……	4
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿…	6
九州大学大学史料室名簿……………	7
受贈図書一覧……………	7
大学史料室日誌抄録……………	8



温泉治療学研究所本館（1930年代初頭）

1931年（昭和6）11月、本学最初の附置研究所である温泉治療学研究所が、現在の生体防御医学研究所附属病院の地、大分県速見郡朝日村・石垣村（現別府市）に設置された。「温泉治療学ノ学理及応用ニ関スル全般的ノ研究」を目的としたもので、わが国唯一の施設であった。設立には松浦鎮次郎総長を始めとする本学の努力は勿論、朝日・石垣両村や九州水力電気会社など、関係地域の尽力があった。写真は「別府名所」絵葉書の中の一枚。なお、この絵葉書は米国のアンティークショップで購入されたものが杉岡洋一前総長に贈られ、それが大学史料室に寄贈されたものである。温研創立当時の様子を知りうる貴重な史料（現物）である。

大学アーカイブス（文書館）私見

寺崎昌男

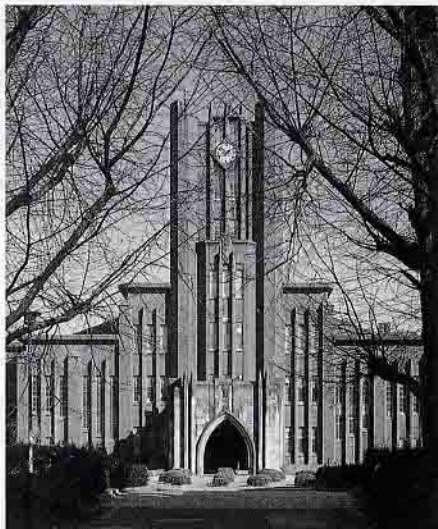
「ユニヴァーシティ・アーカイブス」という言葉を聞いたのは、40年ほど昔、大学院生時代だった。研究助手としてチームを組んでいたアメリカ人教授の口から聞かされた。しかし、何とも得体の知れない言葉だった。

ライブラリーという言葉は、もちろん中学生のころから知っていた。一方、アメリカ帰りの先輩から「〇〇コレクション」という言い方があることも聞いた。

例えば、「スタンフォード大学にはフーパー・ライブラリーという元大統領が寄付した図書館があって、戦争と平和と革命に関する図書や文書を収集している。その中のアーカイブスに寄贈されている 트레이ナー・コレクションは、戦後日本の教育改革を知るには是非見ておかななくては行けない。何しろ占領軍の教育担当課長だったマーク・トレイナーの文書だからね」というように語られる。

「ははあ、『コレクション』というのはどこかが集めた資料という意味ではなく『誰々の手許に集められていた文書群』のことなのだ。日本でいえば『〇〇氏文書』というのに近いんだ。それを図書館が入手したのだ」。そう想像した。1970年代末、実際にスタンフォード大学で 트레이ナー・コレクションを利用して見て、理解は間違っていなかったことが分かった。

これに比べ、「大学アーカイブス」の方は分からない。



東京大学史史料室のある大講堂(安田講堂)

最初に大学院生、のちに教官になった東京大学を見渡しても、それらしき設備はない。「文書倉庫」のようなものだろうか。弥生門という校門のそばに「通信倉庫」とかいうプレハブ倉庫がある。安田講堂の地下も文書置き場になっているという。どちらも事務の人たちが使っているようだ。ああいうものなのだろう、と想像するのがやっとだった。

歴史学専門の方々なら、ずっと早くから知っておられたに違いない。また文学史や法律史・政治史などの専門家でドイツ大学のアルヒーフ、フランス大学のアルシーヴなどを利用された向きは「大学アーカイブス」など全く既知に属するものだったろう。科学史研究家から、アメリカの大学アーカイブスをご自分の科学史研究にいかにか貴重不可欠だったかを聞いたのは、後のことである。

私は日本の近代大学史の研究を細々と続けていたが、あのころは、この言葉に対応する実体も浮かばず、イメージもなかった。海外で大学アーカイブスを利用された学内の教授諸氏からも「東大にアーカイブスがないのはおかしい」という声を聞いたことはなかった。

日本でこの施設の重要さが理解されるようになった経過は、長い話なので、ここには書けない。だが結果を言えば、21世紀に入った今、大学のアーカイブス（大学文書館）は、日本の多くの伝統的私立大学・そして国立大学にも続々と姿を現している。

早稲田、慶應義塾、同志社などの伝統的私学が一步先んじていたが、国立、とくに旧帝国大学も、最近では追いついた。東北大学が記念資料室をつくったのは早くも1963年だったが、去年11月には「東北大学史料館」と改称されている。東京大学が東京大学史史料室を開設したのは1987年のことだった。昨年、京都大学は京都大学文書館を立ち上げた。九州大学大学史料室も、発生としては七十五年史編纂の副産物だったかも知れない。だが今や日本における大学アーカイブスの元気な「新生児」の一人である。

1980年代はじめ、『東京大学百年史』のメンバーが中心になって、世界の大学アーカイブス調査をやったことがある。

調査結果や文献研究をもとに纏めてみたところ、

大学アーカイブスは特に次のような史料を集め、整理保管し、そして広く閲覧に供し、同時に研究にも当たっているのだということが分かった。

- ①大学の管理運営の歴史を示す公的文書、簿冊、事務記録その他の文書。
- ②大学内諸機関の議事録、意見書、答申、報告書など。
- ③大学や各学部などの刊行する年報、要覧、履習要項、授業時間割、雑誌、新聞、広報誌など行政・教務学務に関する資料類。
- ④卒業生の在学記録、アルバム、講義ノート、伝記、書簡など。
- ⑤学長、学部長、教授、職員などの私蔵する、あるいは生前に私蔵していた文書類のうち、特に大学に関係するもの。
- ⑥大学設立者、寄付者、卒業生など関係者の文書。
- ⑦大学の記章、門標、記念品、トロフィー、旗、制服制帽、印爾印章などの物品。
- ⑧大学に関する写真、ビデオ、テープ、フィルム、その他の電子媒体記録など。
- ⑨学問史的意味を持つ実験器具、研究室製作品、報告書など。

どの国の大学のアーカイブスも、上のような種類の史料を、それぞれ個性を発揮しながら収集し、利用に供している。80年代はじめにアメリカを訪ねてみると、例えばシカゴ大学アーカイブスはとくに①に重点を置き、理事会・学長等の記録の完全保管に力を注いでいた。それが「売り」となって、広い閲覧室には、ヨーロッパ各国の研究者が集まっていた。ミネソタ大学は④に関する資料が豊富なようで、でたらめに頼んでみた50年前のバイオロジー学部の時間割と学部案内のパンフレットを、ポンと見せてくれた。日本の学部事務室に同じものがあつたら、とっくに廃棄されただろう。

全米アーキビスト協会の年次大会というのに出席したら、MITアーカイブスの責任者というアラブ系とおぼしい堂々たる女性が、いかにして学内資料を集中させるかを熱心に講義していた。図書館司書や博物館学芸員と同じく、この職場がめざましい女性プロフェッショナルズの職場となっているかも分かった。そして、短期大学も含め、アメリカの大学の90%以上がアーカイブスを持っていたのである。

リストに戻ると、注目をひくのは、⑦⑧⑨のような「文書」ならざる物品・資料も大学アーカイブスの大切な収集・保存対象だという点である。

もし大学博物館があれば収集が重なりかねない。だが実際は、物に即して収集を分担していることも分かった。

なるほど、このリストに書いたようなものが集められるのなら、そしてそれが手続きを経て自由に閲覧できるのなら、歴史研究には大いに役立つはずだ。

「ウイーン大学のアルヒーフには日本にはない伊藤博文の書簡があります。それは憲法調査に渡欧した伊藤が師事した元教授ローレンツ・フォン・シュタインの文書の中に、シュタイン宛の手紙が保存されていたからです」。かつて憲政史研究者からぼんやりと聞いていたそんな情報も、アメリカを訪ねてから一挙にリアルに思い出された。

大学アーカイブスの内容・役割・使命は、史料編纂所とも総合資料館や図書館とも違う。東大の史料室を学内措置で開設してもらうとき、それを分かってもらうのにも苦勞した。

たかが百年前後しか経っていない大学の史料、それも多くは行政文書を、史料編纂所が取り扱ってくれるはずはない。附属図書館と史料室とでは、収集文書の質、分類保存のやり方その他、全く違う。外国大学では図書館の付置付設となっている例もあるが、本筋は独立施設である。司書とアーカイブス責任者とは専門性が全く違う。総合資料館という名の博物館とは、収集物が全く違う——。そんなことを分かってもらうにも大汗をかいた。

だが、最近の趨勢を見ると、ようやく大学関係者や行政当局の理解も育ってきた気がする。「国際社会の大学を見て下さい、アーカイブスは、ライブラリー、ミュージアムと並ぶ、近代大学の必置施設ですよ」。二昔前なら絶叫しなければ分かってもらえなかった、いや、叫べば叫ぶほど怪訝な顔をされかねなかったこういう話も、やっと聞いてもらえるようになった。加えて国立大学にとっては情報公開法の要請も見逃せない。開示を求められるのは現用文書だけではない。歴史文書もまた保管整理しておかなければ、社会的責任が果たせないからである。今日の現用文書は、明日には歴史文書になるのである。

さらに言えば、大学激動期の今、最も求められるのは各大学の個性とアイデンティティーの確認と、学内外におけるその共有とである。アーカイブスという組織は、その拠点になる。また、アメリカの大学アーカイブスがとくに地域と協力して熱心に行っている公開・展示行事などを見ると、アーカイブスは、地域と大学の関係づくりに有効

なだけでなく、大学自身の広報活動にも不可欠で、時には最良の施設であることが分かる。仮に国立大学が独立行政法人化するような場合、現在と違うかたちの「自律性」とアカウンタビリティが求められるようになる。そうなれば、一見地味に見えるアーカイブスは、逆に大学サバイバルのための重要な働きを分け持つ部署になろう。

一昨年（2000）年の秋、京都大学には本部直轄下に大々的

に大学文書館が開設され、いま日の出の勢いで整備が進んでいる。そこへ旧帝大の大学史文書館や史料室のメンバーが集まって、2月には全国研究会を開いた。その他の旧帝大にも、次々にアーカイブスができるだろう。

九州大学でも、史料室が脱皮・成長を遂げて、他大学と同様、基礎を固められるよう祈りたい。

（桜美林大学大学院教授・東京大学名誉教授）

低年次教育における大学史・大学論の意義と大学アーカイブ

—第1回総長賞を受賞して—

新 谷 恭 明
折 田 悦 郎

平成13年（2001）10月に第1回九州大学総長賞が発表された。総長賞は国際的に高い評価を得た若手研究者を励ます目的でつくられたものであるが、これまでにP & P（九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト）の助成を受けた研究にも授与されることになった。その栄えある第1回の総長賞を私たち大学史料室を中心とする研究グループがいただくことになったのである（メンバーは文末を参照）。これは実に嬉しいことであると同時に、大学アーカイブの新たな機能というものを確信したのである。

九州大学の大学アーカイブセクションである大学史料室では、その業務として九州大学を記録する資・史料を収集してきた。資・史料の収集・整理・保存は大学アーカイブの基本的機能であるが、これら大学アーカイブに集められた情報は活用されることで光を放つ。私たちは大学史料室の設置を求めたときに、「九州大学史料の収集・保存について—九州大学史料室設置の提言—」（1991年4月。九州大学75年史編集委員会小委員会編）という冊子（B5判。23頁）を作成した。このとき私たちは「歴史認識は、ある意味で自己確認の作業である。その意味で、九州大学の歴史を検討することは、九州大学とは何かを問い、それはどの様にあるべきかを考えることに等しい。このように考えれば、それは学内諸改革や九州大学の将来構想とも密接な関連をもつのである」と提起した。さいわいこの提言が容れられて大学史料室が発足したのであるが、このときの思いはその後の急激

な大学改革の進展の中でますます深いものになっていった。

一方で、私たちは学生気質の変化が気になり始めていた。それは短絡した偏差値至上主義の受験競争の中で、学生諸君の「学問することへの夢」が失われつつあることと関係している。学生諸君にとって大学は夢を見る場ではなく、ただの無味乾燥な人生の通過点になりつつある。九州大学が選ばれる理由は受験産業が指し示した偏差値が妥当であったということであって、九州大学の持っている歴史的伝統によるものではなくなっているようなのだ。そうした学生が九州大学で学ぶことを誇りとしているであろうか。九州大学で学ぶことの誇りとは、先人の築き上げた伝統を引き継ぐことにある。このことを学生諸君とともに考え直さなくてはならないという気持ちが、大学史料室の仕事を積み上げていく中で強くなっていった。

そうして大学史料室と本学の史料収集・保存に関する委員会の有志の方々と共同研究をしようと試みたのが、「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」というプロジェクトであり、これが平成10～12年度のP & Pの助成を受けることになったのである。このプロジェクトは大学史料室の蓄積を学生への教育という形で還元するとともに、そうした教育が大学の自己確認や、アカウンタビリティのための基礎作業になることを示すものでもある。そしてまた、このような活動が大学アーカイブセクションの重要な機能であることを確立する試みでもあった。

すでに私たちは前年度（平成9年度）後学期から全学共通教育科目（周辺教養科目）の選択科目として、折田による「九州大学の歴史」の授業を開始しており、これをP&Pの一環に採り入れる形で共同研究を進めた。

こうして始めた試行授業「九州大学の歴史」では、先ず最初に「高等教育制度の概説」に時間を割くこととした。なぜならば受講生が帝国大学や旧制の高等学校・中学校・専門学校についての知識を殆ど持たず、これらを踏まえなければ、九大の創立自体についても理解することが難しかったからである。しかし、学生の関心は何よりも自分の所属する学部の歴史にあるので、その配慮も怠るわけにはいかなかった。そういうことを含めて授業ではいくつかの工夫をしたが、例えば前学期の最終日に行った箱崎キャンパスの見学は好評であったと思う。また旧制高校のイメージが学生にはつかみにくかったようなので、新制大学移行直前の松山高等学校（旧制）を舞台にした「ダウンタウンヒーローズ」（山田洋次監督）のビデオをみた。最後に主人公が新制九州大学の法学部を受験するというこの映画は、非常に学生の興味をひいたようである。そのほかに科学史・大学史の碩学である中山茂神奈川大学教授を招聘し、講義の時間枠を使って公開講演会「帝国大学の創立と展開」を拝聴した。平成10年度の試行授業については、報告書『試行授業「九州大学の歴史」に対する学生の反応について』にまとめたので、関心のある方はご一読いただきたい。

「九州大学の歴史」で得られた知見などを踏まえ私たちは、新たな課題にチャレンジすることにした。先ず、九州大学の歴史を知った学生が自分の大学（自分自身でもある）に非常に高いプラスイメージを持つようになったことは大きな成果であったが、それが偏狭な愛校心の醸成にとどまるのは私たちの目的とするところではなかったからである。九州大学で、いや大学というところで学んだ若者たちにはこの国際社会の中で相応の指導力を持った人材となってもらいたい、というのが我々大学人の願いであろう。そのためには大学とはそもそもどういう存在であり、いかなる役割を果たしてきたのか、そしてこれからの大学が担わなければならない課題は何か、ということについての理解が必要だと思ったからである。「九州大学の歴史」のみならずそうした大学史・大学論の大きな物語が、これから学問に取り掛かろうとしている低年次の学生諸君に語られる必要があると



第1回総長賞授与式（左：新谷。右：杉岡前総長）

考えたのである。実際、「九州大学の歴史」を受講した学生たちの中からも、よりグローバルな大学史・大学論の授業を望む声が出てきていた。そういう観点から試行授業「大学とは何か」を平成11年度から開講することにしたのである。

しかし、その大学が何であるのかについて私たち自身がどれだけ深く理解しているのかは、実は大いに疑問なのであった。そこでこの試行授業には「ともに考える」という副題をつけることにした。私たち自身が学ぶ姿勢を持たない限り学生には伝わらないと考えたからだ。

試行授業「大学とは何か —ともに考える—」は、最終的には初学者向け大学論のテキストをつくることをねらって授業の組み立てを構想した（近刊!）。講義の前半分は大学史を機軸とした歴史的内容を中心とし、後半分は自治、学際化、情報化、国際交流、入試制度、地域社会、留学生など、大学が現在直面している問題を素材として採り上げることとした。講義はこのプロジェクトに加わった教官が交代で行うことにしたが、誰もが大学研究の専門家とは限らない。敢えて未知の領域を学んで講義に臨むことになった方も多い。まさに「ともに考える」を実行したのである。さらに検討すべき課題が見つかる新たなメンバーを増やしていった。総長には前学期の最終日に特別講義をしていただいたが、これは学生には大変良い経験だったようだ（P&Pの期間が終了した平成13年には柴田洋三郎副学長にお願いした）。権藤與志夫名誉教授をゲスト講師に迎え、留学の話をしていただいたときの学生の反響も大きかった。先達が夢を語ることの意義を改めて知らされたものである。

平成11年度後学期には大学研究の権威である寺崎昌男桜美林大学大学院教授（東京大学名誉教授）を招聘し、押川元重大学教育研究センター教授と折田によるシンポジウム＝「大学における低年次

教育の意義」(コーディネーターは新谷)を講義時間の枠内で行った。学生にしてみれば斯界の一流メンバーをパネラーとするシンポジウムに参加してしまっただけで、大きな刺激であったようだ。このシンポジウムの記録も報告書にまとめているが、この内容だけでも日本の大学教育に与える衝撃的な内容を含んでいるので是非とも読んでいただきたいと思う。

私たちの共同研究の最初の目的は、偏差値のみを基準に入学して来る学生たちに対して自らの所属する大学の歴史を学ばせることにより、アイデンティティの確立とモチベーションの喚起を促すと同時に、大学教育、特に低年次教育への貢献をなすことにあった。その成果が認められての総長賞受賞であったと思う。

先般、今年度最後の授業を行ったが、その際学生に書いてもらった意見に「九大の教養はつまらないです」と断言し、「自分の研究と事務と授業の3つがあるから授業に力をいれられない、とかいう先生がいましたが、そんなんでいいんですか?」という厳しい指摘をしてくるものがあつた。低年次教育のあり方が学生の側から批判的に問われているのである。現段階でその問いに対する回答があるようには思えないが、今回の総長賞受賞は大学史料室がその答案のための材料くらいは準備するように、という示唆なのだろうと思う。私たちの挑戦は緒についたばかりであることも間違いな

いことのようにだ。

(しんややすあき・大学史料室長・大学院人間環境学
研究院教授/おりたえつろう・大学史料室助教授)

P & P 研究代表者・分担者名簿

研究代表者

新谷 恭明

(大学史料室長・人間環境学研究院・教授)

研究分担者

佐伯 弘次 (人文科学研究院・助教授)

有馬 學 (比較社会文化研究院・教授)

吉岡 齊 (比較社会文化研究院・教授)

福田 晴虔 (人間環境学研究院・教授)

久米 弘 (人間環境学研究院・助教授)

田代 武博 (人間環境学研究科・助手)

植田 信廣 (法学研究院・教授)

荻野 喜弘 (経済学研究院・教授)

松原 孝俊 (言語文化研究院・教授)

青木 義和 (理学研究院・教授)

多田 功 (医学系研究科・教授)

森 祐行 (工学研究院・教授)

横川 洋 (農学研究院・教授)

東定 宣昌 (石炭研究資料センター・教授)

押川 元重 (大学教育研究センター・教授)

長野 剛 (大学教育研究センター・助教授)

白土 悟 (留学生センター・助教授)

廣川左千男 (情報基盤センター・教授)

折田 悦郎 (大学史料室・助教授)

九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

委員長 ○人環院 教授 新谷 恭明
副委員長 ○医 院 教授 井上 尚英
副委員長 ○石炭研 教授 東定 宣昌
○人文院 助教授 佐伯 弘次
○比文院 教授 有馬 學
○法 院 助教授 熊野 直樹
○経 院 教授 荻野 喜弘
言文院 教授 松原 孝俊
○理 院 教授 青木 義和
数理院 教授 佐藤 榮一
歯 院 教授 坂井 英隆
薬 院 教授 前田 稔
工 院 教授 井澤 英二
シ情院 助教授 正代 隆義
総 院 助教授 松永 信博

○農 院 教授 村田 武
生医研 教授 中山 敬一
応 研 教授 佐藤浩之助
機能研 助教授 初井 敏英
医 病 教授 野瀬 善明
歯 病 教授 池本 清海
図書館長 有川 節夫
生環セ 助教授 吉田 敏
熱 研 助教授 林 静夫
アイセ 教授 大崎 進
中央分析 助教授 坂下 寛文
留 セ 助教授 清水 百合
有化研 助教授 稲永 純二
大教セ 助教授 長野 剛
先端セ 教授 桑野 範之

アドミ 教授 武谷 峻一
 博物館 助教授 中牟田義博
 ○基盤セ 教授 廣川佐千男
 健セ 助教授 一宮 厚
 医短 教授 中野 武彦

副学長 柴田洋三郎
 事務局長 早田 憲治
 ○は専門委員会委員
 (2002年3月1日現在)

九州大学大学史料室名簿

室長	人環院	教授	新谷 恭明	兼任	経院	教授	荻野 喜弘
専任		助教授	折田 悦郎	〃	石炭研	教授	東定 宣昌
兼任	人文院	助教授	佐伯 弘次	事務補佐員			馬場 恵
〃	比文院	教授	有馬 學	〃			筑紫 啓子
〃	法学院	教授	植田 信廣				(2002年3月1日現在)
〃	法学院	助教授	熊野 直樹				

受贈図書一覧 (2001年8月～2001年12月)

森 肇 教授退官記念誌		拓殖大学創立百年史編纂室編	2001. 9
森 肇 先生退官記念事業会	1990. 9	拓殖大学百年史研究 8号	
岩波 科学ライブラリー 24 カオス 流転する自然		拓殖大学日本文化研究所附属近現代研究センター編	2001.10
森肇	1995. 6	大谷大学百年史〈通史編〉	
名古屋大学大学史資料室ニュース 第11号		大谷大学百年史編集委員会編	2001.10
名古屋大学大学史資料室編	2001. 9	大谷大学百年史 資料編	
東京大学史史料室ニュース 第26号		大谷大学百年史編集委員会編	2001.10
東京大学史史料室編	2001. 3	校史 Vol.13	
東京大学史紀要 第一九号		國學院大學校史資料課	2001. 8
東京大学史料の保存に関する委員会編		学習院大学五十年史ニュース 第6号 (最終号)	
	2001. 3	学習院大学五十年史編纂室編	2001. 3
東北大学史料館だより 第2号		学習院大学五十年史 下巻	
東北大学史料館編	2001.10	学習院大学五十年史編纂委員会編	2001.10
お茶の水女子大学 大学資料目録1		京都大学大学文書館だより 第1号	
お茶の水女子大学編	2001. 3	京都大学大学文書館	2001.11
高等教育研究叢書68 大学の戦略的経営と人材開発—第28回 (2000年度) 研究員集会の記録—		京都大学百年史 資料編 3	
広島大学高等教育研究開発センター編		京都大学百年史編集委員会編	2001. 3
	2001. 9	関西大学115年のあゆみ	
コリーグ No.32		関西大学年史編纂委員会編	2001.11
広島大学高等教育研究開発センター編		120年の楽譜 大学史紀要 第六号	
	2001. 9	明治大学大学史料委員会編	2001.11
サティア《あるがまま》 第43号～第44号		金沢大学資料館だより 第18号	
東洋大学井上円了記念学術センター編		金沢大学資料館編	2001.11
	2001. 7、2001.10	日本女子大学学園事典 創立100年の軌跡	
拓殖大学創立一〇〇年記念出版 満川龜太郎—地域・地球事情の啓蒙者 上、下		日本女子大学編	2001.12
		年表 日本女子大学の100年	
		百年史編纂事務室 (成瀬記念館) 編	2001.12

南山大学五十年史	
南山大学五〇年史作成小委員会編	2001. 3
関西学院事典	
関西学院事典編集委員会編	2001. 9
大学アーカイヴズ No. 25	
全国大学史資料協議会東日本部会	2001.10
平成十二年度 古文書資料目録 六	
福岡市総合図書館文書資料課	2001. 3

福岡市総合図書館研究紀要 2号	
福岡市総合図書館編	2001. 3
記念館だより 第25号	
旧制高等学校記念館・旧制高等学校記念館友の会	2001.10
[凡例]	
掲載したのは受贈図書の一部である。	

大学史料室日誌抄録 (2001年8月～2001年12月)

8. 4 (土) 折田助教授、文学部同窓会にて講演。文学部同窓会会員、大学史料室視察のため来室。	
8.17 (金) P & P 説明聞取 (新谷室長、折田助教授出席)。	
9. 3 (月) 拓殖大学創立百年史編纂室より、大学史料室視察のため来室。	
9.14 (金) 山田芳雄名誉教授、大学史料室視察のため来室。	
9.20 (木) 折田助教授、名古屋大学大学史資料室公開シンポジウム (「開かれた大学」とこれからの文書資料管理・情報公開) に参加。	
9.30 (日) 『大学史料室ニュース』第18号刊行。	
10. 3 (水) 折田助教授、全国大学史資料協議会2001年度総会・全国研究会に参加 (～5日。於神奈川大学)。	
10.10 (水) 企画広報室よりの「九州大学各種委員会の再編案について (依頼)」に回答。	
10.12 (金) 折田助教授、2001年度後期全学共通教育科目「九州大学の歴史」開講。	
10.16 (火) 工学部等事務部より所蔵文書移管。	
10.17 (水) 2001年度後期「大学とは何か—ともに考える—」開講。 宮内庁書陵部編修課より昭和天皇御	
	進講者 (九大関係) の件につき照会。
	10.29 (月) 共同研究「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」(代表新谷室長)、2001年九州大学総長賞 (P & P 成果表彰) を受賞、授与式 (於九州大学国際研究交流プラザ。新谷室長、折田助教授出席)。
	競争的資金に係る間接経費 (全学共通経費) の配分を受ける。 稲津孝彦名誉教授より史料寄贈。
	11. 5 (月) 杉岡洋一総長、柴田洋三郎副学長より史料寄贈。
	11.12 (月) 森肇名誉教授より史料寄贈。
	11.23 (金) 新谷室長、2001年度大学史研究セミナーに参加 (～25日。於広島大学)。
	11.29 (木) 稲永由紀広島大学高等教育研究開発センター助手、史料調査のため来室。
	11.30 (金) 『ARCHIVES OF KYUSHU UNIVERSITY』No. 3 (パンフレット) 刊行。
	12. 5 (水) 横山愛氏より史料寄贈。
	12.21 (金) 保田その京都大学大学文書館助手、大学史料室視察のため来室。
	12.28 (金) 第2回文書館設置準備委員会開催 (新谷委員長出席)。

九州大学大学史料室ニュース 第19号

発行日 2002年3月31日 (年2回刊)

編集
発行

九州大学大学史料室

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

電話・FAX (092) 642-2292

Archives of Kyushu University

印刷 (株)ミドリ印刷